

学会ニュース

日本女性学会

第17号 1984年3月

目 次

- ヴァージニア・ウルフ — フェミニストあるいは平和主義者としての側面
レベッカ・ジェニスン…………… 2
- 両性性（両性具有性）について
 - ① 私と両性具有性…………… しまようこ…………… 7
 - ② 学習会の感想…………… 村上 益子…………… 10
 - ③ 今後への期待…………… 溝口 明代…………… 12
- 日本の女性学と日本女性…………… 田中由布子…………… 14
- 4月の研究報告会のおしらせ…………… 15
- 第2回インド女性学会議のおしらせ…………… 16
- 第2回国際女性会議開催のおしらせ…………… 16
- 幹事会だより…………… 17
- 新入会員紹介…………… 17
- 寄贈図書・資料…………… 17
- 編集後記…………… 18

ヴァージニア・ウルフ—フェミニスト

あるいは平和主義者としての側面

レベッカ・ジェニスン

女性学の発展に伴い、フェミニズムの視点を含む文学評論は、次第により大きな影響を持ち始めつつある。既成の学問を見直して行く中で、偏見によってこれまで見逃されてきた作家や作品を評価する一方、すでに知られている作家をフェミニズムの視点から再評価する作業が進められている。今世紀の初期から小説家であり評論家として知られているヴァージニア・ウルフも、女性作家の流れを再発見することに長年努力したと言える。ウルフはいくつかの作品やエッセイを通して、作家になった女性たちの背負った歴史的条件や内面的葛藤を鋭く指摘した。

現在、ウルフ自身もフェミニズムの視点から見直されてきている。すなわち、彼女はフェミニズム、あるいは平和主義の思想家として再評価され、今日の女性作家に残された彼女の「遺産」が確認されつつある。ここではこの問題をいくつかの点にしぼって考えて見たい。

今、ウルフのエッセイを読み直して見ると、もっともよく知られている『自分自身の部屋』を含めて、「女性と文学」を扱うものは多い。それらの中で女性作家のかかえてきた歴史的・社会的条件が深く考察されている。

『自分自身の部屋』に出てくる一例を上げて見よう。その中でウルフはシェークスピアの想像上の妹ジュディスについて書いている。ジュディスの生涯を語る意味は、もしシェークスピアの時代に彼ほどの才能を持った女性が生まれてきたとしても、彼女は外的な状況に巻き込まれ、偉大な戯曲家や詩人になれなかつたであろうということを表明するところにある。想像上のジュディスの生涯は無名のまま、自殺によって若く終るだろうとウルフは考える。

ウルフは物理的条件がどのように女性の文学活動に影響を与えるかという問題を取り扱うと同時に、女性の内面的な障害も明確にしようとした。たとえば、「女性のための職業」という別のエッセイの中で、作家の卵だったころの自分を例にして、当時の父権社会における価値観といかに戦わねばならなかつたかを描く。しかしその価値観は外的なものではなく、内面化した形で、いわゆる「家庭の天使」(The Angel in the House)として表わされ、ウルフはその天使を殺すことなしには作家になれないと述べる。この天使は「男たちが女に望むような女性であった。彼女はほんとうに思いやりがあり、とても魅力的で全く無私の人だった。(中略)要するに、彼女は自分自身の望みも意志も持たずに、むしろ他の望みや意志に合わせる性質なのだった。」^①しかし、近づいて見ると同じ天使は殺人者の正体をあらわす。彼女の殺した女たちの死体は歴史書や伝記書にちらばっている、とウルフはいう。彼女自身は、その天使と次のように戦っていた。

私はその天使の方を向き、天使ののどを掴んだ。私は天使を殺そうと最善を尽した。もし法廷に呼び出され、殺人罪にとわれたとしたら、私は正当防衛であるといいわけするだろう—^②作家としての私が。

「女性のための職業」はウルフの次に書こうとしていた作品、『ページター家の人びと—小説・エッセイ』に直接関係しているらしいが、なぜかウルフはこの作品を完成できなかった。この作品は単なる小説、あるいはエッセイという形にとどまらず、小説・エッセイという実験的な形式を採用している。ウルフの未発表の原稿を編成し出版したミシェル・レスカが言うように、この本が完成していれば、いまだに貧相な、図書館の女性学部門にも、「メアリー・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』の横に」置かれるような古典的作品になっていたにちがいない。^③

『ページター家の人びと』をあきらめたのち、ウルフは数年間をかけて、長編小説である『歳月』とエッセイ『三枚のギニー』を書いた。ウルフ自身はこの二つを「一つの本」として見ていたが『歳月』は高く評価されたのに対して、フェミニズムやパシフィズムの思想をはっきりと主張する『三枚のギニー』は批判的な反応を引き起した。

『三枚のギニー』は第二次世界大戦の直前に書かれたが、中に現われる反戦思想や父権社会に対する批判は突然生じたのではなく、ウルフの初期の作品にも見ることができる。たとえば1921年に出版された「ある社会」—^④という短編小説において、何人かの女性が登場するが、彼女たちは男性によって創造された「文明」を調査することに夢中になっていく。その趣旨は、男性が今まで成し得たことを調べて、それが人類を存続させていくほどの価値があるかどうか、またその社会に入っていく息子達を育てるため女性は自らの人生を捧げるべきかどうかを考えることにあった。結局彼女たちは「子供を産むことに自らの若さを捧げるのが女性の義務である」と考える必要はない」という結論を出す。そしてさらに彼女たちは「男性優位」を廃棄すべきであり、また、男性の破壊的行為の影響がこれ以上続かないように、彼らを直接出産や育児に参加させる必要があると主張する。

男が子供を産める方法を考えよう。そうするしかない。害をもたらさない仕事を男性に与えられないならば、善良な人びとも良書もなくなってしまうし、男の勝手な活動の結果、私達—^⑤は滅ぼされてしまうだろうから。

そして先に述べたように、『自分自身の部屋』の中で作家になろうとする女性にかかわる障害が論じられたと同時に、さらに父権社会における好戦思想に対する分析や批判がなされている。

なるほど、彼らは、金力と権力がそなわっているが、そのかわり、胸の中には鷲、禿鷹がひそみ、そのため、肝臓をひき裂かれる苦しみを、たえず受けなければならない。つまり、所有本能、獲得欲がひそんでいるので、そのために彼らは、常に他人の土地と所有物を求め

ずにはいられない。国境をひろめ、旗を掲げ、戦艦を造り、毒ガスをこしらえ、自分達の生命ばかりか、子供たちの生命までも投げ出すことになるのだ。」^⑥

『自分自身の部屋』が出版されてからほぼ10年後に、ウルフは彼女の作品の中でも最もラディカルな作品と見なされている『三枚のギニー』を刊行した。その中にはウルフの女性解放を目指す精神と無益な戦争をやめさせたいという願望が複雑に絡み合っている。

『三枚のギニー』の書き出しにはウルフはある男性からの「戦争防止についてのあなたのご意見はいかがですか？」という問いかけを仮定する。この長いエッセイは、この問いに対する答えとして書かれている。

その中でウルフは、女性の独立した「影響力」を獲得できる手段としての女子教育を奨める。それは「他の人びとの操作のための学問、支配を殺害と土地と資本を獲得するための学問」を拒否する新しい教育である。このような好戦思想を根絶し、戦争を防止するために、「三枚のギニー」のうちの一ギニーをまず女子大学の建設資金のために、さらに一ギニーを女子雇用促進協会に寄付すると言う。そして最後の一ギニーを同じ目的から平和運動に寄付することを決意するのである。つまりウルフはその三枚のギニーを寄付する行為は、自分にとって究極的には同一のこと — 戦争を防止すること — をめざしていると主張している。

ウルフの夫であったレーナルドも、甥であるクェントン・ベルも彼女は政治に関心がなかったと考えていたらしい。しかし、ここで見て来たようにウルフは充分その時代の苦悩を認識し、そして自身の「政治思想」を持っていた。さらにその思想の根本には父権社会に対する批判があったといえる。ウルフは父権社会を支える価値観が戦争という最も暴力的な抑圧へ導くことを見ぬいていた。フェミニズムやパシフィズムの思想家としての分析において、「公的な恐怖」（戦争）と「私的な恐怖」との密接な関係を指摘した。

家庭内の自由を剝奪される恐怖…この恐怖は小さな、とるにたらない、私的なものであるけれども、もう一方の公的な恐怖と結びついています。それは小さくもないし、無視もできない恐怖なのです。^⑦

さらに、ファシズムの問題を追求していたウルフは政治的抑圧と女性の性の抑圧との関係を指摘している。^⑧ ウルフが取り上げた問題の中で現在も重要な意味を持つものは「権力とは何か」であると言ってよい。彼女は女性が権力から除外されている、つまり「アウトサイダー」であると考えている。そして、それゆえその「アウトサイダーの社会」は、歴史的に独自の価値観を持たざるを得なかったと見ている。そこで問われるべき問題はこうである。私たちもその（父権社会）の歩みを共にすべきかどうか。あるいは、どういう条件の下で共にすべきか。とりわけその教養のある男たちの歩みは私達をどこへ導いて行くのか。女性は、教養、仕事、経済力、職業がなけ

れば当然、力を持ちえない。結局ウルフはその歩みに参加しなければならないと認めながら、父権社会の価値観を補強する側に立つことにならないように、(女子雇用促進協会にギニー寄付するにあたって)以下のような条件を付けるのである。

1. 性、階級、人種を問わず、すべての有資格者に就職の機会を与えるよう協力する。
1. 職業に就く女性は自立に必要な給料を受取るべきであるが、それ以上は受取るべきではない。
1. お金のために自らの「頭脳」を売ってはいけない。
1. 有名になつたりほめられたりするより、無名のまま妥協せずに自らの立場を貫く。
1. 国家への誇りと忠誠心は間違った形で、人びとを分断するので、そのような非現実的な忠誠心にとらわれない。
1. 戦争にはいっさい協力しない。

以上のような条件をつけた上で、

「職業についても、職業に汚染されないでいられるであろう。また、職業から所有欲や嫉妬や競争心や欲望をなくすことができるであろう。また、その職業を通して自分の考えや意志をもてるようになり、その結果、自分の考えや意志を通して非人間的で野蛮な戦争の恐怖や愚かさをなくすことができるであろう。」^⑨

もし、ウルフが今日の世界を覗くことができたとしたら、彼女はどう思うであろうか。『三枚のギニー』を書くことを強制した「公的な恐怖」つまり現代の父権社会同士の争いの中、核戦争によって人類が破滅させられる可能性が高くなっていること—そしてそれに対応する「私的な恐怖」、特に女性の「産む・産まない」権利や働く権利を脅かすイデオロギーや政策を非難するだろう。

しかし、同時にウルフにとって好ましいいくつかのことにも気がつくであろう。女性作家が自分たちの真実の体験を自由に書けるようになるにはまだ長い時間がかかると考えていたウルフは、アリス・ウォーカーのような小説家の作品を読んだら喜ぶであろう。そして「女として私には国がないのです。女として国がほしいとも思えません。女として私の国は全世界なのです。」という言葉を書いたウルフは、国家や国籍を越えてネットワークを作ろうとしている現代の女たちの仕事を共感を持って見るであろう。あえていうならば、彼女がいるアメリカで起りつつあるジェンダー・ギャップを観察したら、『三枚のギニー』で描いたアウトサイダーの社会の新しい影響力は一層強くなって来ていると考えるであろう。

最後にウルフの「その歩みを共にすべきだろうか」という問いかけに対して、私たちはいま楽観的な答えを用意できないけれど、フローレンス・ハウラがいつているように、フェミニズムの

思想にめざめる女性と男性の数が少しずつ増えていくとしたら「その歩み」自体を変える可能性も少しずつ大きくなっていくかもしれない。私たちのやっていくこととして、それに向って努力することしかないと思う。

注

- ① Leaska, mitchell, edo;
"Professions for Women," The Pargitevs, Hogarth Press, 1978, P.
××;×
- ② *ibid.*, p. ××ix;
- ③ *ibid.*, p. vii
- ④ "A Society," Harcourt, Bvace and World 1921
- ⑤ Meyerowitz, Selma; "What is to Console Us," *New Feminist Essays on Virginia Woolf* Macmillan Press, 1981, P. 240
- ⑥ Woolf, Virginia; A Room of One's Own, Granada Publishing, 1977 P.38
- ⑦ Woolf, Vo; Three Guineas, Harcourt Brace and Jovanovitch 1966 P.142
- ⑧ この問題を扱った文献の中では次の二つが興味深い: Macciocchi, Maria-Antonietta, "Female Sexuality in Fascist Ideology," *Feminist Review*, 1979, No.1; "Women and Militarism," Connexions, Winter, 1984, No. 11
- ⑨ Three Guineas, P. 83
- ⑩ アリス・ウォーカーは黒人女性作家であるが、最近の小説 *The Color Purple* は非常に迫力のある作品で昨年のピューリッツァー賞を受賞した。
- ⑪ Three Guineas, P.108

(1983. 12. 3 研究会報告)

両性性（両性具有性）について

私と両性具有性

しま ようこ

昨年6月の総会のシンポジウムで、哲学、文学、社会学、心理学の立場から「フェミニズムと学問」の関わりが問題提起された折りに、それぞれの分野を女性学の視点からとらえ直すための共通項として「両性具有性」が浮かび上がった。これを引き継ぐかたちで1月28日に、上記テーマで語り合う会が持たれた。現代のフェミニズムは女性解放のみでなく、男性も含めて人間としての生き方を問い直す思想でもあるので、「両性具有性」の研究には、フェミニズムの奥行きを豊かにする期待がこめられている。

研究会の新しいすすめ方への期待

今回の世話人（村上・溝口・しま）の間で、一般に研究会で採られる手続き — 発表者の提言を軸として参加者が討論に加わるやり方 — を採らない試みが提案された。両性原理に関しては、E・ユングの〈アニマ・アニムス〉をはじめ、いくつかの分野で研究者がそれぞれ独自の概念を展開しているが、体系的に深められているとは言えない。そのため、既成の概念に基づいて両性具有性を整理し、これを共有するところから私たちの研究会を出発させることへの疑問にぶつかったわけである。研究の成果・効率を急がず、テーマと研究会参加者の主体との関わりを意識化し、両性具有性への「私たちの切り口」を発見することを今回の意図に据えて、自由に語り合った。

基本的な共通理解を

研究会の方向づけとして、両性具有性のこれまで用いられてきた概念を整理することもやはり必要ではないか（北沢）との意見も出され、性行動のレベルでのバイセクシュアルおよび器管の半陰陽という意味ではなく、心理・社会的行動や人格特性、存在原理のレベルで私たちは両性具有性を追求していくこと（八木）が確認された。この範囲でも、両性具有性をとらえる枠組みは、個人の内面に焦点があてられたり、社会システムや宇宙観に基づくものなど千差万別なので、それらに振りまわされないために、まず自分を支点とした切り口を見つけない（溝口）。たとえば父性社会の中でつくられた男らしさ・女らしさではなく、それぞれに男性性と女性性がどのようにダイナミックにかかわり合っているのか、また歪められているのかを具体的にとらえてみたい。その過程で、私たちが関心を持っている両性具有性の実体が見えてくるのではないだろうか（村上）。

性差を意味づける視点の重要性

発生学的には人間の原型は女性であり、そこから男性が分化していくと言われている。このことから見ても、男女ははじめから別の存在ではなく両性的な原点を持つと言えるだろう。生殖以外のあらゆる性差と見なされる現象は、歴史的につくられたものと考えてよい（雑賀）。確かに「性差はつくられる」という観点は、女性解放運動の過程で、必然的に焦点をあてるべき有効なものであった。しかし、性染色体の差は生殖以外には生物学的影響を及ぼさないか否かについては、現代の科学の水準では決定的な答えは出せないのではないだろうか。最近の大脳生理学の研究では、男の左右の大脳はより明確に分業体制を守り、女の場合はより協業的にはたらくという機能的差異も報告されている。今後、生殖以外のさまざまな生物的差異が明確にされたとしても、両性原理に立った思想を確立していれば、これにたじろぐことなく、性差の事実を性差別に結びつけるのをくい止められる。これが重要な点ではないだろうか（しま）。性差を正しく認めて、男女の分業よりも協業のあり方を検討した方が理にかなっているという考え方が支持されることもあり得るだろう（北沢）。

「らしさ」にまつわる日常の言語感覚—生育史とのかかわり

個人の内部で両性的特徴が絡み合っている現象を、一般に、生物としての性に結びつけて男らしさ・女らしさとして感じとる。この「らしさ」を、セクシズムから全く自由に受けとめることは不可能であり、用いることにアレルギーを感じる。私たちは、「らしさ」をどのような意味で用いるのかについて意思統一しておく必要があるのではないか（北沢）。

たとえば、Aさんは女らしく、Bさんは女くさいといった個人的な語感で女らしさと女くささを使い分けるが、その実体を分析すると、性差だけではなく人格の個人差、民族差も絡んでいて複雑に見える。人格特徴にしても、どの側面に焦点をあてて「らしさ」を使うのかによって違ってくる（漆田）。それらの特徴は、どのような生育史の過程で、どのように両性性の絡み具合に差が表現されたのかを分析してみると面白い。自分の場合は、男の子の出生が期待される中で育ち、幼少期は男っぽく行動することがプライドになっていたけれど、成長後にこれへのアンチテーゼとして女性性を意識的に付け加えたのかもしれない。結局、どちらも訓練して身についたという実感が強いので、やはり本質的には両性性を内に持っていると思う（溝口）。生育史と「らしさ」の関連をきめ細かくとらえながら、優劣で対比する観点を徹底的に点検し直し、相対化ないし相補的にとらえる視点を出発点に据えたい（八木）。

風土に押し切られない自己選択を

フェミニズムの視点に目ざめても、自分の生活現点がこれと全く相容れない葛藤に悩まされる場合もある。たとえば、夫が商社勤務の場合、妻には典型的な女性役割のみが期待される。企業側からは、自我を持たない無色透明な女が『日本の美学』として評価され、そこからはみ出しては生きていけない。長い地獄の葛藤を経てあきらめの境地となり、徹底的に墮落していくのが商社マンの妻としての切実な問題になっている（奥田）。その場合、まず夫を変えていくことから始めるべきだろう。妻を伝統的な女性役割のみに閉じ込める社会へのはたらきかけの窓口として、夫がより両性的な感じ方を理解しないと問題解決への糸口がつかみにくい（山口）。

また、自分の内部の両性具有性が具体的にどのように表現されるかは、人生の時期によって異なる。高校生の頃つっぱっていた自分が、その後主婦の役割を負うようになった生活過程で、女性性と自然になじんでいったという気もする。やはり人間は本質的に男女両性具有的だと言える実感がある（浅野）。どのような個人の発達過程で、どのような社会的条件に出会うかが問題だと思われるので、両性具有性は個人と社会の関係のあり方として今後深めていく方向が開けるのではないか（溝口）。

迷路を切り捨てず、両性具有性の幹線を探る

性別役割に規定された社会生活を送ってこなかったつもりだが、人間としてのやさしさが女としてのやさしさとして受けとめられてしまうことはある。ペルソナとしての社会的役割ではなく、自分の核に向かって自己成熟していくとき、確かに人間は両性具有的な心の動き、行動をしていると思う。性別役割によって能力を二分せず、男も女も核の部分でしっかり討論できる風土をつくっていききたい（寺岡）。

参加者それぞれに、自分の生活体験と両性具有性の関わりを語り合いながら、しばしば陥る思考の迷路を切り捨てずに、集団思考によって両性具有性の幹線を探るカジを取っていくことができれば、方法それ自体も新しいタイプの研究会になっていくだろう。満足できる結論は得られなかったけれども、とにかく一定のお膳立てを前提として効率中心の研究会を志向してしまう習性を破ろうとする意図は認めることができる（嶋田）。

日常生活に関連しながらも、両性具有性というテーマは高度の抽象性をも合わせ持っているため、10回近い継続研究が必要ではないかという声も聞かれた。次回は、E・ユング著『内なる異性』（海鳴社）および青木やよひ編『フェミニズムの宇宙』（新評論）を読んだ上で、両性具有性への『私たちの切り口』をもう一步明確にする予定となった。

学 習 会 の 感 想

村 上 益 子

「両性具有性」というテーマは、テーマ自体が漠然としてつかみがたいテーマであったので、今回は会員の方々が前提そのものを確認しあう意味での話し合いであった。その時のお話し合いの中から、私なりにいろいろ考え方を整理してみたいと思う。

まずはじめに大きく二つの立場があると思う。一つは「女はつくられる」という立場、つまり男性的なもの、女性的なものを文化的・歴史的につくられるものとみなす、一種の「環境説」である。従来のステレオタイプとしての女性的なものは、男性中心的な文化のもとにつくられたものである、つまり性差別のもとにつくられたものである。したがって性差別がなくなれば、性差よりも個人差の方が大きくなるであろうとする考え方である。これをつきつめてゆくと、人格の核は中性的で、同質的なものだという考え方に行きつく傾向となろう。その結果、この共通のものでは、何も男にひけをとらず、差異がない — たとえば、現に共通一次とか、偏差値、収入、地位の面では、能力さえあれば、性差は存在しないわけであるから、性差異を問題にすること自体がおかしいということになる。しかし、この立場は、そもそも、男女の人格は、その核において、中性的で同質だという前提にたつから、男女間の素質の差異を前提とした「両性具有性」というテーマとは、無縁で、相互にふれあわないことになる。

これに対してもう一つの立場は、いわば「環境説」の立場である。性差別がなくなっても、男性と女性とはそれぞれの素質において異質と考える立場である。たとえば、今回の会后に出席されたルイズ・キーダーさんは「性アイデンティティーは人格の核の部分に存在する」という旨の発言をされていた。私は、これは「自分が女である」ということは、自分の人格の根本に関することであるという意味にうけとった。このような考え方は、中性的な人格論はいうまでもなく、男女の差異を超えた人間性一般等をとなえるタイプの抽象的思考とはちがった考え方である。また日本的な中性的な考え方、たとえば「異質を認めない連続の思想」（中根千枝）ともちがった考え方である。また、西欧的、父権的一神論の風土とも異った考え方である。

私は、「両性具有性」というテーマは、「環境説」でなく、「素質説」の立場の側からの問題提起だと思う。性差別がなくなっても、人格の中核の部分に性差異が存在するという前提にたったテーマだと思う。この発想は、異質のものに対する憧憬と畏敬の念を根底にもっている。たとえばゲーテが、「マリーエンバートの悲歌」の中の例の有名な一節で「永遠に名づけられないものの謎を積みながら波立ち進む。そのことをわれわれは『敬虔』と名づける」と歌ったのは、女

性的なものに対するゲーテの賛嘆の情から発したもののように思われる。ゲーテが「永遠に女性的なもの」と呼んだのは、かの偉大なゲーテをもってしても、男性である彼がどうしてもちえないある優れたものを、われわれ女性も持っているということの意味ではなからうか。

この「素質説」の立場に立つと、男性と女性の性差異は、単なる生物的次元の差異をこえて、パーソナリティ全体の次元にまで及ぶものとなる。たとえば、アランは「男性の精神は精神の半分にすぎない。しかも決していい方の半分ではない」といっている。精神的な卓越さの性格にも、性差異を認める立場の典型であろう。したがって、もっともすぐれたヒューマニズムとは、半分の単一的なものではなく、異質のものが混ざり合った性格のものということになる。父性社会は、女性的原理を抑圧したから、異質のもの、ゆたかなドラマをつくりえず、不毛の対立と排斥をもたらしたとノイマンはのべている。

このように、文化の次元にまで、性差異を考える「素質説」の上に「両性具有性」というテーマがなり立つと私は思うのであるが、その中で更に二つの方向が考えられる。異質を前提とし、異質の媒介を求める点では同じであるが、最終的目標をどこにおくかで、ちがいがでてくるように思われる。一番目は、名前の通り、「両性具有」の方を重視する考え方であり、二番目は、男性、女性のそれぞれの個性を豊かにするためにこそ「両性具有」が必要なのだとする考え方である。一番目の考え方にとっては、性差異よりも、両性の調和こそ重要である。この考え方は、男女の原理が融合して、単一の調和に達すべきだとする一元論的傾向をもっている。たとえば『男女両性具有』の著者であるJ・シンガーは次のようにのべている。古い父権的一神教にかわって「男女両性具有的一神教が、西欧世界にとって新しく選ばれるべき宗教であると、私には思われる」と。更に今回の会后で浅野美和子さんが紹介された日本民衆宗教の場合もそうである。教祖が女の場合「女即男」、男の場合「男即女」ということであった。

二番目の考え方にとっては、男性的、または女性的な個性に対する関心が重要ということになる。その例としては、先にのべたゲーテを初めとして、個人の窮極の理想を、男性的または女性的な個性の完成と考えるすべての人が該当しよう。この考え方の人たちは、現実の性差別の障害をのりこえてでも、その根底にある性差異を追求しようとするわけである。女性性を人格の核に関するものとされるキーダーさんもこの立場であろう。この立場は執拗な個人主義に裏づけられている。解放された人間像は、完成に近づくほど個性的になると考えられている。つまり女は男性の美德を身につけることによってますます女らしくなり、男は女性の美德を身につけることによってますます男らしくなるということである。ここでは、男女の関係は相互に他者の美德を学び合うことによって自己を豊富化してゆく終ることのないドラマとなるのである。したがって、個人の活力が衰退し、個人のアイデンティティーそのものが弱くなると、かえって男か女かわから

ない人種がふえるということであろう。そしてまた日本のように、そもそも個人主義的でない国においては、この問題はともすると、性差別の撤廃イコール性差異の消滅というように短絡してしまいやすいの傾向があるので、充分注意すべきだと思う次第である。

今 後 へ の 期 待

溝 口 明 代

現代に生きる者にとって「女性差別」があると感じられるとしたら、その原因が、「男性と女性の性差」にもとづく仕組みの不適合にあるということは自明のことだ。ならばその根源に横たわる「両性の差異」とは何か、両性になにがしかの原型が存在するとしたならばどのようなものであり、現在の「性差」を消去し得るとしたら、いかように、どこまで可能か、反対に、わたしたちが、幻想性によってしか立ち得ないという限界にある類、人類の智慧として、性差を必要とするものならば、どのような型、どのような関連のあり方として持つべきであろうか。この問題の提起は、歴史軸から見て、「女性問題」の始まりであったのだが、将来、仮りに両性性について、ある解決がもたらされたとしたら、それは、この問題の終りをも意味するであろう。言い換えれば、「女性問題」という存在の全てであり、「人間存在」をも意味しているともいい得るであろう。

今回は、個としての私、自己がどのような視点で、どのように、右の課題にこだわっているのかをお互いに提示したと言える。

それらはある人たちにとっては、生理的、肉体的な差異、バイオテクノロジーなどを使用した新たな科学の発見による性差、脳の働き、嗅覚、気質、労働と授乳の関係など科学的な新たな謎の解明に関心があり、ある人は、セックスではなく心理的構造として概念化することに、反対に、他の人は、肉体をも包みこむセクシュアルな両性性に、ポイントがある。一方、心理といっても、内面的自我構造の分析の中に見る人、性差をはさんだ集団と個の関係に視点を持つ人、立場を変えて社会的な現場での問題として産業社会のイメージのもの化について。ノモスとしてのモラルや美意識など、反対に、嫁舅の家族問題、職場の期待される役割像、ラベル的個人イメージなど個別具体型の問題の提起、時限を変えて、コスモスとしての宗教、実存の意味、イデオロギーや、思考のパターン、学問研究や、テクニクの方法論等々非常に多様であった。

一人ひとりそれぞれ違った切り口からの問題の提起であったのだが、ほんの短い時間のうちに

これだけ多様なテーマとなって現われたこと、どれもが両性性を考える上で主要なキポイントになり得る契機を含んでいると予想されたこと。この事実の中に「両性性」というテーマの深淵で宏大な全貌を垣間見た思いがしたのだった。

今後は、これら無数の個別の問題を、具体的な行動—「状況」から、或いは、抽象的で目的化された知的な定型—社会構造、「制度」から、さらには、それらをささえている原理—宇宙の意味づけとして、分析、解読、定位への位置づけ、統合への作業を、押し進める必要があるであろう。

また別の切り口から見れば、時間の軸にそって原因から状況に、反対に未来目標への模策へと、問題を解き進める必要があるとも云えるし、個の心身の深層に向けた追求と同時に、集団と個の関係、集団の深層細部への解明へと進める必要があるとも云えるであろう。

方法論をとっても、従来 of 学問の分野別の方法、また、個の生きざまを通しての実験から、或いは、機械を使った、世界的規模の情報の収集と分析、その実験等々。表現の方法も単に文字だけでなく多様な形をとることもあり得るのではなからうか。

特に、今だ、表象記号としての言葉を始めとして、知の制度そのものが男性性の枠の中にあるとき、みえなくされている女性性を発見する学問の方法として、各々が、各々の状況の中に「見えざるものを見る」場にもとづく学問は、女性学にとって重要な方法なのではあるまいか、さらに云えば、「両性性」のような、全貌の不明瞭な問題は、より多くの異ったポイントから相対化して考えることの方が、ある方向へのかたよりや硬直を防ぎ、より正確な型を得ることになると思われる。そして、このような、ある一つの共通の枠を持った場の中で一点に集中させつつ、他方、色々な知の交錯の中で、個々に発見したものを再度、各々の知的なこだわりへ、フィードバックさせてゆく、それが、私達力なのであろうし、結果は、全女性に帰ってゆくものと考えてるのである。それが、「男性学」の解体であり、私達の創造ではあるまいか、個々のするどい視点私の生き方、女の生命の全面展開、その全てをネットワークした宇宙創造の追求。生きた学問にしてゆきたいものだと思う。

その意味をふまえて、今後はより一層合目的に、意識的に、よりシャープに目標に接近させて、且つ有機的に問題ととり組みたいと思う。今はまだあまりにも遠い解離と感ずる各々の生き方、個別具体と知の制度、宇宙知への糸をより高度な技術と方法の創造で、一刻も早く統合へ接近させてゆきたいものである。

(1984. 1. 28)

日本の女性学と日本女性

田 中 由布子

日本の女性学も軌道に乗り始めて喜ばしいことである。日本の女性解放へ向けて一歩ずつ、地歩を固めていければ幸いである。ただ日本の女性学が軌道に乗り、本格的に稼働しはじめる前に私達が自省しなければならないのは、日本の女性学とはあくまで日本女性の解放のためのものである、ということではないだろうか。日本の女性学もその出発点において、やむにやまれぬ日本女性のおかれている現実の苦悩の中から出発した筈である。現実の苦悩を一点でも解決したいという希いの結果が女性の視点の発見であり、女性学の建設の方向ではなかったのか。学とはもともと実践を出発点とするものである。生きている実践の苦悩、矛盾の模索の結果が批判的な学を生み出していく。労働者階級の苦悩、矛盾の模索の結果がマルクスをしてマルクスの経済学を生み出させ、女性の苦悩、矛盾の模索の結果が女性学を生み出さしめたのではなかったのか。仮にそうであるとすれば、マルクスの経済学が諸政策を生み出し、それが社会変革の実践へとつながっていったように、日本の女性学も諸政策を生み出し、かつそれが日本女性の社会変革の実践へとつながっていくものとならなければならない。つまり、女性学が日本の女性のためのものであるとするならば、それは日本女性の社会変革の実践力へつながっていくほどの稼働性を持たなければならないということである。

対抗文化圏に住む女性として日本の社会科学を批判する意味でも出発した日本の女性学がそのあとをたどり、輸入学や文献処理の学へ随っていつてはなるまい。輸入学や文献処理の学は日本女性の実践の世界へ到るまでの翻訳能力を持たない限り、日本女性にとっての理論的武器とはなりえないからである。輸入学や文献処理の学がそれ自体として浮き上がり日本女性の実践に触れるものを持たないとき、日本の女性にとって女性学とは一体何の意味をもつものであろうか。女性の実践と日本の女性学とが何らフィードバックする循環性を持たぬとき、女性学にとって日本の女性の実践もまた意味のないものとなる。

勿論、研究はそれ自身の運動法則を持っている。実践からある程度切り離されていないとできないことも、また事実である。しかしそれは研究内容の実践性、実践性のある研究内容であることを切り捨てはしないからだ。マルクスの経済学が労働者階級を突き動かしたのはその実践的な性格による。日本の女性学が日本の女性を突き動かせるのはこれからの研究内容の実践性による。そのことはまた女性研究者自身にもはね返ってくる。女性研究者が日本の社会科学を突き崩せるほどの実践性を持たなかった場合、日本の社会科学は変わるまい。女性学による日本の社会科学

の色の塗りかえとは、日本の社会科学の琴線に触れた途端に熾烈な闘いが待っているのだということ。これを覚悟していないと、日本の社会科学のしっぺ返しによる退歩も余儀なくされるだろう。そのことは女性の実践についても同じである。女性解放運動が日本社会の琴線に触れ始めるとき、そこで熾烈な闘いを乗り越えていかない限り、日本社会のしっぺ返しの前に退潮を余儀なくされるのだということ。

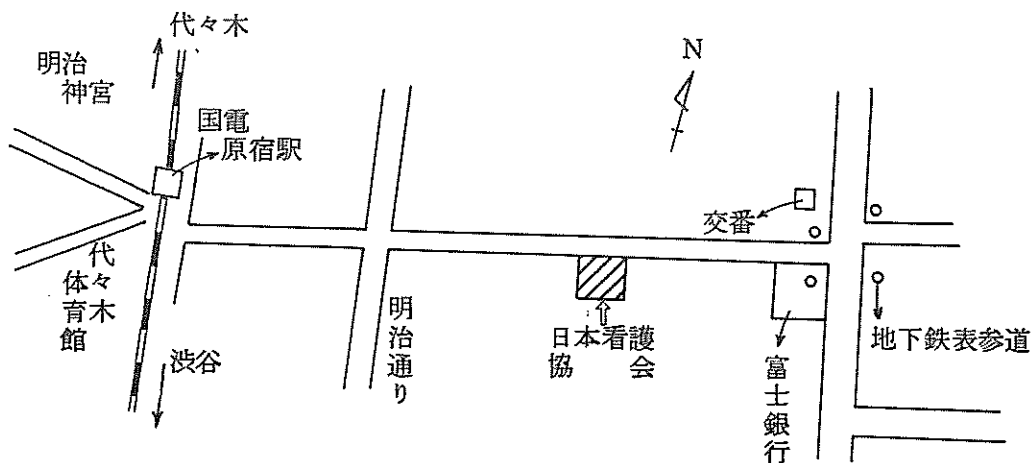
日本の女性解放へ向けての日本の女性学、そうであって欲しいと願うものである。そして私自身、そういう研究を続けていきたいと思っている。 (投稿)

4月の研究報告会のお知らせ

テーマ 両性性(両性具有性)について(2)
世話人 しまようこ・村上益子・溝口明代
日時 4月7日(土) 午後1時半～4時半
会場 日本看護協会3階教室
東京都渋谷区神宮前5-8-2

(国電原宿駅より徒歩約10分。地下鉄銀座線または半蔵門線、表参道駅より徒歩約5分)

※ 前回同様、自由討議による学習会方式をとります。また、できれば、E・ユング『内なる異性』(海鳴社)1200円、青木やよひ編『フェミニズムの宇宙』(新評論)1800円をお読み下さい。



「第2回インド女性学会議」のおしらせ

インド女性学会は、1981年にボンベイのS・N・D・T女子大学で第1回インド女性学会議を開催しました。今年第2回目をカーンプル大学で開きます。

テーマ：Gender Justice

期 日：10月21日～24日

分科会：1) Women, Law and Legal Studies

2) Women's Work and Employment

3) Women in the Political Process

第2回国際女性会議開催のおしらせ

第2回国際女性会議 (Second International Interdisciplinary Congress on Women) — Women's Worlds • Strategies for Empowerment — が開かれます。

開催地 グロニンゲン市 (オランダ)

開催場所 Martinihal Congress Centre

開催日 1984年4月17～21日

登録費 450フローリン

パネル、分科会、シンポジウムなど多彩多様。テーマとして予定されているものの例 ——
女性と哲学、父権制と女性、聖書とコーランの文化的インパクト、女性学カリキュラム、女性と科学、親と子、働く女性と二重負担、女性と金融、結婚と家族形態、女性と倫理、女性とスポーツ、女性運動における女性聖職者の役割、女性と国際法、女性と軍隊、女性と産科学、フェミニスト・メディア等々

◇ 幹事会だより

1月28日の研究報告会後にもたれた幹事会では一般会員3名の参加がありました。当日の話し合いは、以下のとおりです。

- 事務所移転予定(3月中)にともない事務所の所在地に関する件について。
- 新入会員に対するニュース・レターのバックナンバーサービスは、中止します。
- 来年度総会の開催予定(6月中・東京)について、会場、企画等について話し合われました。
詳細は次号でお知らせします。

※ なお、会員の方で研究報告書等の用意がある方は、来る3月末日までに事務所の方へ御連絡下さい。4月7日の幹事会で検討させていただきます。

◇ 新入会員紹介

松並 綾子 鳥取大学教養部 英文学
宮嶋 裕徳 人文書院 女性の思考方法
武田まり子 鳥取県立岩美高校養護教諭 カウンセリング、性教育
島木 葉子 神戸神間社
寺岡 寿子 福山大学講師 ドイツ語、ドイツ文学

※ 第16号で御紹介した方のうち次の方のお名前が間違っておりましたので、お詫びして訂正いたします。

沖田 明美 → 沖田 真理

松原ケイコ → 松原 慶子 日本女子大学家政学部児童学科学生、絵本の中に見られる女性像
フェミニズムの生んだ絵本

◇ 寄贈図書・資料

「婦人教育情報」No.8 国立婦人教育会館
「昭和58年度女性学講座資料」 "
「会館だより」No.24 "
「昭和57年度家庭教育研究セミナー報告書」 "
「婦人展望」'83, 9, 10, 11, 12, '84, 1, 婦人会館出版部
「婦人情報センターだより」No.14, 15 東京都婦人情報センター

「地域一家族」No.20 「地域一家族」編集委員会

「JAUW」 No.131 大学婦人協会

「婦人問題懇話会会報—特集エスカップ地域会議に向けて—」No.39 1983, (鳥居千代香氏より)

「救援センターニュース」No.1 東京強姦救援センター

「VOICE OF WOMEN」No.43, 44, 45, 46 日本女性学研究会

田嶋陽子「Virginia Woolf」『英語青年』'81, 8

田嶋陽子「うしろ姿のロビンソンと眠れるロクサーナーSFにおける男と女」『英語青年』'83, 9

鳥居千代香「いまインドで—持参金に泣く花嫁も多い」『日本経済新聞』1983 10, 11 (夕刊)

柳美代子『住まいと女—女性からみた日本住居史』京都松香堂 1983

亀山美知子「近代日本看護史における看護婦の社会的地位評価に関する研究」No.40, 41, 42, 43 『看護』日本看護協会出版会 1983 8, 9, 10, 11

編 集 後 記

「両性性」の学習会場で、1人ひとりが自分の視点をもっと語りあいたいのだという熱っぽさを感じた。まず、自分の言葉で思うところを自由に話し合うことの大切さ、それこそが、やがては男性中心の社会の中で、少しずつ改革の糸口をつかむことにつながるだろう。「両性性」このもっとも根源的で、期待に満ちたテーマの今後が楽しみである。

長い冬も、もうすぐ春、今年は少しばかりまばゆい陽ざしも見えそうだ。 (亀山)

発 行 日 本 女 性 学 会
〒103 東京都中央区八重洲1-4-21
共同ビル13F 西洋美術研究会内
電 話 03-274-1791
